

封建体制から産業体制へ —— サン=シモンの社会思想 ——

白瀬小百合

はじめに

クロード・アンリ・ド・サン=シモン (1760-1825) の思想は、19 世紀フランスの産業化に寄与したと考えられている。たしかに、サン=シモンの思想では「産業」をめぐる問題が中核をなしており、「産業者 (les industriels)」、「産業主義 (l'industrialisme)」といった語は彼が発明し、使いはじめたものである。形容詞としての« industriel »は 18 世紀から用いられていたが、名詞としてこの語が登場するのは、サン=シモンの『産業』(*L'Industrie*, 1816-1818) が最初であるとされる。また、「産業主義」の語は、『産業者の教理問答』(*Catéchisme des industriels*, 1823-1824) においてはじめて用いられた造語である¹。

この事実はサン=シモンを「産業」の思想家として位置づけることを容易にしているが、その一方でわれわれが彼の思想の本質へと接近することを妨げてもいる。「産業者」や「産業主義」の語から、今日的な意味での「産業社会」や工業化を安易に思い浮かべることは正当とは言えないだろう。たしかに、サン=シモンは「産業」を重視した社会の構築を企図していた。しかしながら、それは単純な産業活動の振興や、公共事業の奨励に留まるものではなかっただろう。サン=シモンは、革命によって成し遂げられなかった社会の変革を志向しており、よってその思想は産業の物質的な側面のみならず、社会組織全体にかかわりを持つものである。サン=シモンの意図した「産業体制」の社会とはいかなるものであったのだろうか。本稿では『産業体制論²』(*Du système industriel*, 1821-1822) の「第一部」を中心に提起し、上記の問いを検討する。この著作は初期、中期から後期に至る間に移り変わったサン=シモンの多様な論点を総括しており、彼の思想を俯瞰する上でもっとも重要な文献のひとつである。

近年、日本においては、フランス社会史や文化史の研究においてサン=シモン主義者の活動がしばしば取り上げられているものの³、サン=シモン自身の著作から思想を読み解こうとする研究はさほど活発に取り組みされてこなかった⁴。フランスでは 2000 年以降、継続的にこの思想家についての研究文献が刊行されている⁵。これらの比較的新しい研究成果を参照しつつ、サン=シモンの産業思想に迫りたい。

I « système »についての考察

サン=シモンは貴族の子弟として生まれ、若い時代には軍人としてアメリカ独立戦争に参戦し、退役後はさまざまな事業活動や土地投機を行っていた。同時代の知識人や思想家と異なり、必ずしも高度な教育や専門的な学問的修養を積んではいない点がこの思想家を特徴づけている。著作の内容は多岐に亘り、年代ごとに中心的なテーマは科学、政治、宗教と移り変わりを見せている⁶。しかしながら一見無関係にも見受けられるこれらの主題は、産業への関心と革命後の社会を再組織するという意図で貫かれている。社会において不遇な状況にある産業者たちの地位を向上させ、最終的には「もっとも貧しい階級の精神的・物質的生活の改善に努める⁷」ことが、彼の目標となっていく。

『産業体制論』の「第一部」は、1820年9月から12月に刊行された12の小冊子を書籍にまとめ直したもので、1821年に刊行された⁸。それぞれの断章は書簡形式や対話形式で書かれており、国王や産業者たちに新しい社会制度の必要性を訴えかける内容となっている。『産業体制論』で取り上げられる事柄の多くは、それ以前に『産業』(*L'Industrie*, 1816-1818)や『組織者』(*L'Organisateur*, 1819-1820)で論じられた内容を含むが、単なる繰り返しではなく、議論の補足と敷衍が加えられている。

本章では、まず『産業体制論』のタイトルにも用いられている« système »の語について、考察を加えたい。リトレの『フランス語辞典⁹』によれば、「système」は原義的には「整序された諸部分からなる複合体」であり、「国家の政治、社会体制 [constitution]」をも意味し、次いで「用いることで個々の概念を配置し、結びつける学説」を指すとされている。サン=シモンの初期の著作である『19世紀の科学的研究序説』(*Introduction aux travaux scientifiques du XIX^e siècle*, 1807-1808)においても« système」の語は用いられているが、この頃の主な含意は「学説」、「体系」の意味であった。サン=シモンはコンディヤックによる« système」の定義を引用している。

“体系 [Un système] とは、技術や科学のさまざまな部分が互いを支え合い、より以降の諸部分が以前の諸部分によって説明されるように、それらの部分を配置したものに他ならない。他の諸部分を説明するものは原理と呼ばれ、体系は原理の数が少なければ少ないほど、いっそう完全になる。すなわち、諸原理をただ一つの原理に還元することが望ましくさえある”¹⁰。

この定義によれば、もっとも完全な体系とは、その諸原理がもっともよく整序されている体系であり、もっとも不完全な体系とは、その内においてもっとも対立的な諸原理を同列に置く体系である¹¹。[強調原文]

初期著作においてサン=シモンは新たな科学的体系の組織化を試みている。1802-1813年にかけての著作は、哲学や科学についての考察を主題としたものが多く、

1810年には19世紀に相応しい新たな『百科全書』の作成が構想されている¹²。18世紀の学問よりも創造的な学問を構築するために、より実証的で、一般的な科学が必要であるとサン＝シモンは考えていた。『人間科学に関する覚書』(*Mémoire sur la science de l'homme*, 1813)では、天文学、物理学、化学が実証的の学問となったことに続いて、今後は生理学、哲学が実証的になるべきだという主張が展開されている¹³。啓蒙思想家たちによる「18世紀の百科全書は、その時代には良いが、現代にはそぐわない精神において作られ」ており、19世紀の百科全書を作る際には、「科学はその全体においても部分においても観察に基礎を置かなければならない」という原則が提示されている¹⁴。

一方、1814年以降、サン＝シモンの著作は政治的主張を多く含むようになり、「*système*」の語は学問体系だけではなく、むしろ社会制度を示すために用いられるようになっていく¹⁵。特に後期の著作では「*régime*」が「*système*」としばしば言い換えられており¹⁶、「体制」や「制度」としての意味合いが強くなっていることがうかがえる。だが、それ以前の「科学的体系」に関する議論も、後の「社会体制」についての議論と決して無関係なものではない。学問、ひいては人類の文明の発展は、体制の移行に不可欠なものとしてとらえられていた。『産業体制論』に先行する著作『産業』での言及を見てみよう。

あらゆる社会制度 [*régime social*] は哲学体系の応用である。したがって、制度に対応するはずの新たな哲学体系をあらかじめ確立しておくことなしに、新たな制度を設けることは不可能である¹⁷。

このことについて、サン＝シモンはギリシア・ローマから近代に至る社会秩序の変化と、多神教から一神教への移行を引き合いに出しながら論じている¹⁸。ソクラテスに端を発するとされる哲学的な革命と多神教から一神教への移行はともに起こり、一神教が組織されたことによって、シャルルマーニュによる征服といった政治的革命が生じてきたと彼は考える。哲学と社会制度との相互の結びつきを踏まえ、ミュツソはサン＝シモンにおける「社会の下部構造は精神的なもの」であり、「ある社会体制 [*un système social*] の諸部分を結びつけるもの、その「基盤」を構築するものとは、科学的、宗教的、道徳的、あるいはその他の思想や信仰である¹⁹」と指摘している。ミュツソの指摘は、マルクスにおける上部構造と下部構造の議論を念頭に置いたものである。マルクスは『経済学批判』(*Contribution à la critique de l'économie politique*, 1859)の序文で、彼の思想の根幹をなす概念を記述している。すなわち、生産関係の総体からなる経済的なメカニズムが社会の基盤 (*la base concrète*) をなし、その上に法律的、政治的な上部構造 (*une superstructure*) が打ち立てられるという定式である²⁰。したがって、社会的意識の諸形態は基盤である生産関係に対応したものとなる。マルクスにおいては、「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、知的生

活の進行一般を制約する」とされ、「人間の意識がその存在を規定するのではなく、反対に人間の社会的存在が彼らの意識を規定する²¹⁾」と考えられている。マルクスが社会の基盤に生産関係を据え、人間の精神活動を二義的なものとしているのに対し、サン=シモンは「新たな哲学体系」を出発点として、社会制度の構築を提案する。エンゲルスによって、サン=シモンには社会主義思想のほぼ全てが萌芽として含まれていると評価されているが²²⁾、社会の基盤を何に求めるかというこの点において、マルクスとの明確な相違を見て取ることができるだろう。

以上で見てきたように、サン=シモンの議論においては「体制」と「体系」が« système »の語によって結び付けられていることがわかる。『産業体制論』で用いられる« système »の語は、政治的、社会的な側面では「体制」として立ち現われてくるが、その背後には社会体制を演繹しうる学問体系が含意されている。学問の発展段階と、社会体制の組織がサン=シモンにおいて関連付けられていることに留意しよう。このことは、後段で述べる体制移行の議論と大きくかかわってくる部分である。

II 革命への批判

サン=シモンは『産業体制論』において、書名に書かれている通り産業体制について論じ、これを今日目指すべき体制として主張している。彼が産業体制への移行を唱える思想的背景には、革命に対する批判がある。サン=シモンの同時代には、メーストル (1753-1821) やボナルド (1754-1840)、ラムネー²³⁾ (1782-1854) といった伝統主義の思想家が見られ、革命に対する激しい批判を展開していた。例えばメーストルは革命について以下のように言及している。「われわれが加担できるもっとも大きな罪のひとつは、疑いなく主権 [la souveraineté] に対する襲撃であり、これ以上に恐ろしい展開などない²⁴⁾。彼ら反革命の思想家は、革命以前の政治制度や宗教と結びついた伝統的な権力に価値を見出し、旧体制への回帰を説いていた。一方、サン=シモンによる革命批判の主張は、彼らとは性格を異にする。彼は革命について以下のように述べている。

革命の現実的な目的は現在まで達成されておらず、まさにそうであるがゆえに、この目的はなおのこと存在し続けている。これを成し遂げる上での主要な障害が取り除かれたということを除けば、この目的はそのありったけの力と広がりとともに、未だに存在し続けているのである。というのも、個人にとってそうであるように政治体にとっても、あらゆる現実的な欲求は、それが満たされるまで必ず持続するのである [……]。したがって、革命の終結には程遠く、事のなりゆきが革命に与えた目的を完全に達成すること、つまり新たな政治体制の成立によってしか、革命を終わらせることはできないのだ²⁵⁾。

サン＝シモンの革命に対する批判点は、それが「果たされたこと」にあるのではなく、「果たされなかったこと」にある。サン＝シモンにおいて、「革命の現実的な目的」とは、すなわち体制の移行であり、1789年以降、30年に亘って革命は継続した状態にあるととらえられている。しかしながら、この目的を達成するためには、新たな革命が必要とされているわけではない。体制の移行は「血みどろで、おぞましく、非人間的な²⁶」革命によってはもたらされず、平和的な手段で実行されると考えられている。

サン＝シモンが産業体制を志向する理由は、主に以下の二点である。第一に、それが革命を終わらせるための唯一の手段であるため、第二には、前章で述べたように科学の発展に伴って社会制度もそれに即した発展を遂げるべきであるためだ。サン＝シモンは「国民が必要としているのはもはや統治されることではなく [……] できるだけ費用がかからぬように管理される [d'être administrée] こと²⁷」だと述べ、力によって支配される封建的な社会制度を脱し、産業体制に移行すべきであると主張する。

初期著作の人間科学に関する考察では、サン＝シモンはあらゆる学問が実証的科学となることを目指していたが、『産業』を執筆しはじめるころから、学問の体系が神学、形而上学、科学の段階を経るという考えを表しはじめる。この議論はオーギュスト・コント（1798-1857）の「三段階の法則（la loi des trios états）」に大きく相似する。この法則では人間の知識が神学的段階（虚構の段階）、形而上学的段階（抽象の段階）、科学的段階（実証の段階）の三つの理論段階を経て発展すると提唱され、それぞれが神学的・軍事的時代、形而上学的・法制的時代、科学的・産業的時代の三段階の文明発展に対応する²⁸。コントは1817年から1824年までサン＝シモンの下で共同研究者として秘書を務めていたため、双方の思想には共通する部分が多く見出される。彼らが互いに影響を与え合ったことは疑いないと考えられているが、それぞれが相互の思想、あるいは著作にどれだけ寄与したかについては、正確には明らかになっていない²⁹。

サン＝シモンにおいては、神学、形而上学、科学の体系は、それぞれ封建体制、移行期の過渡的体制（système transitoire）、産業体制と対応している。革命は神学に支えられた封建体制にピリオドを打つことを果たしたが、しかし産業体制に完全に移行することは果たさなかった。革命を指導した形而上学者と法律家たちが依然として政治的実権を握っているため、しかも彼らには新たな体制を組織する能力がないため、産業体制の移行にまでは至らないのだとサン＝シモンは言う。「実際には、本当に異なった2つの社会組織体制しかなく、またありえない³⁰」とも述べられており、間に過渡的体制を挟むものの、「体制の移行」は本質的には封建体制から産業体制への移行であると指し示されている³¹。

さて、封建的な体制と対置される産業体制とは、具体的にはどのような制度として想定されているのだろうか。封建体制が軍事力にその基礎を置き、力によって人々

を支配する体制であったのに対し、産業体制は、端的に言ってしまえば、産業者階級が政治的権限を持ち行政に携わる社会体制として構想されている。

文明の現状において、第一の政治的能力とは、管理の能力である。もっとも重要な省は財務省であり、もっとも好評を博す統治者とは、もっとも良い予算案、すなわち農耕者、商人、製造業者の利益にもっとも適合した予算案を作る者であろう。

ときに、産業者はすべてのフランス人の中で、管理についてもっともよく学んだ者たちである³²。

このように、優れた管理能力を持つ産業者たちに国家予算の管理を任せることが、産業体制の実際的な面として想定されている。この記述の少し前には「農業、商業、製造業に関する仕事に携わっているフランス人は 2500 万人以上³³おり、ゆえに産業者はフランス国民の大多数をなしている³⁴」と述べられ、産業者による行政運営がさまざま国家の大多数者の利益に繋がることも示唆されている。「産業者」としてサン=シモンが想定しているのは一部の大資本家や企業家だけではなく、あらゆる種類の生産活動や商業活動に従事する者たちを含んだ「階級」である³⁵。したがって、産業に通じた者が統治活動を担うことで、産業に携わる階級全体の地位向上や、生活状況の改善が実現すると考えられている。

実際に産業体制下での政府を組織する方策として、サン=シモンは産業者階級による財務大臣の選出、協議会の組織などを提案しているが、提案の細部についてはここでは立ち入らない。革命という手段によらないならば、いかにして産業体制を実現するのか、この体制が先行する政治理論に対しどのように位置づけられるのか、以下で検討したい。

III 産業体制における王権の問題

体制を移行する、すなわち産業者たちによる政府を組織するためには、特別な議会などを設ける必要はない、とサン=シモンは言う。大臣の地位につけるべき人物の条件や、協議会の組織の仕方を決めることは一般的な行政上の決定に含まれるため、通常の規定に従って取り決めることが可能だとみなされている³⁶。ここで問題となってくるのは、通常の手続きで十分に差配できる事柄でありながらも、議会ではこれらの方策を承認しえないという点である。その理由は以下の通りである。

議会の多数派は産業者ではない人々によって構成されており、彼らは管理の能力では産業者より非常に劣っているのに、公的な事柄を管理するのは自分たちであるべきだ、という確信を保持しています。したがってこの点から、国王が

議会に提出する法案は必然的に否決されるでしょう³⁷。

それでは、どうすれば体制移行を実現できるのだろうか。「王令 [une ordonnance]こそが、この企図を実現すべきである」とサン=シモンは続けている。議会の承認を得ようとする場合は時間をかけなければならず、「ブルボン家の危険と産業者たちの苦痛を長引かせる³⁸」ことになる。一方、王令を出すには国王の意志だけで事足り、即座に体制移行を実現できるという利点が挙げられている。

サン=シモンが提案する体制移行のプロセスでは、王権そのものを否定せずに産業者へ行政の実権を委ねることが目指されている。だが一方で、彼の主張の中心には封建体制からの脱却があり、科学の発展に即した相応しい社会体制を樹立することに力点が置かれていた。王権を保持し続けることは、自身で展開した議論と矛盾するのではないだろうか。

王権の存在が否定されない要因のひとつとして、先行する著作『組織者』にまつわる騒動が背景にあると考えられる。この著作では、フランス国民が王弟をはじめとする王家の全成員と、宮廷の高官たち、高位聖職者、大ブルジョワを失った場合が想定され、そのような場合にも「国家にとって何の政治的支障も生じない」とサン=シモンは論じている³⁹。この文書が元となって、彼は王家を侮辱した容疑で逮捕されている。王令を利用した産業体制政府の樹立は、それ自体としては革命を平和的に早く終わらせるための方策とみなすことが可能だが、『組織者』での経験を考慮に入れるならば、王権の擁護を展開することで周囲からの批判をかわず狙いがあったと推察される。

前章で見た「三段階の法則」に照らしてみても、学問において科学的段階に達している産業体制と、王権が並立することは不合理であるように見受けられる。コントは神権政治に基づく国王の理論は神学的段階に属すると考えており⁴⁰、サン=シモンにとっても同様に、神学的段階に属する封建体制は乗り越えられるべき体制であった。では産業体制下における王権の存在をいかにして是認するかというと、産業者との同盟が「王権の政治的性格を変える⁴¹」ことが主な要因となっている。

[産業者]が要求することは、ただ王権と彼らとがはっきりと、揺るぎなく結びつくことです。[……] 神の恩寵による [par la grace de Dieu] 王権という考えは宗教的信仰に直接基づいていますが、このような信仰それ自体がほとんどすべての支配力を失いつつある、あるいはむしろ失ってしまった時代において、そして残されたわずかな影響力も永久に消え去りつつある時代においては、この考えはもはや何らの力を保つこともできません⁴²。[強調原文]

まず王権神授説に代表されるような神学的理論が有効性を失いつつあるという前提があり、さらに王権が産業的な性格を増すことがここで期待されている。しかし

ながら、この理路によっては王に権力を与える源が何であるか明らかにされていない。神学的段階あるいは封建体制においては、「神の恩寵」が王の権力を正統化していた。神学的正統化を失いながらも産業者に行政の実権を与えうる「権力」は、「神の恩寵」によらないならば、いったい何に由来するのだろうか。この点については詳細に述べられておらず、ただ「今日の王権にとって神の恩寵よりも産業者との同盟が際立って重要である⁴³」と繰り返し強調されるに留まっている。ひとつの推論としては、王権と産業者が結びつくことにより、互いに権力を承認し合う互惠的関係が想定されていた、と考えることができるだろう。王権が産業的な性格を増すことで、「王権の現実の権力は減少するどころか、常に増加⁴⁴」していった、との言及も見られる。王権が産業者に行政上の権力を与え、また産業者は王権に権威付けを行うことで自身の実権を盤石なものとするという、循環的な作用が想定されていたのではないだろうか。

上記のように考えると、王権神授説に代わって産業者たちと王との間で、ある種の社会契約が結ばれることにより、王権に正統性が認められているようにもとらえられる。「神の至上権 (la souveraineté de Dieu)」と「人民主権 (la souveraineté du peuple)」を対置する視点は伝統主義に属する思想家たちの議論⁴⁵にしばしば登場し、人民主権は批判の対象となっている。たしかにサン=シモンも「神の恩寵による王権」と「人民主権」を対立し合う説としてとらえており、封建体制からの脱却を唱えてはいるものの、人民主権の体制を目指していたわけではないことに注意が必要である。サン=シモンは、この二つの主権概念が対立しながらも依存し合う関係にあると考え、相互に他方があってはじめて存在しうる表裏一体をなすものとして位置づけている⁴⁶。前者の否定は後者の伸長を招くのではなく、敵対する相手を持たなければ人民主権は自然に消えていくであろうし、しかもすでに「神の恩寵による王権」という観念は衰退しつつある⁴⁷。したがって、二つの説はともに滅びる運命にあると言えるのだ。

ところで、コントは『社会再組織に必要な科学的作業のプラン⁴⁸』において、人民の理論は政治の形而上学的段階を表すと述べている⁴⁹。人民の理論の基礎をなす社会契約説は、現在の社会状態を想像上の「自然状態」が墮落した状態だと想定しており、コントはこれを「原罪による人類の墮落という、神学的な観念の形而上学的な類似物⁵⁰」として受け止めている。したがって、形而上学的政治は実際には神学的政治の変形に過ぎないとみなされ⁵¹、「神学的段階」と「形而上学的段階」をひとつのまとまりとし、来るべき「科学的段階」と対置している。こうした点は、先に見たサン=シモンにおける「人民主権」への身振りにも通底するものだろう。「神の恩寵による王権」と「人民主権」はいずれも廃れていく途上にあり、これらに取って代わるものとして産業体制が提示されている。サン=シモン、コントの著作において、人民主権の理論に対しては学問および社会体制が段階的發展を遂げる上での通過点として、一定の評価が与えられている⁵²。だが、より実証的な理論と、より産業者に好ましい体制によって、乗り越えられることが不可欠だとみなされている。このこ

とを踏まえると、サン＝シモンに見られる産業者と王権の同盟関係の強調には、王権を正統化する神学的理論を否定すると同時に、人民主権の理論の無制限の拡大を抑制し、否定する意図が含まれていると考えられる。「神の恩寵による王権」に価値を見出す伝統主義者や、「人民主権」を基礎とした社会を目指す社会契約説の支持者たちのように、二つの理論のうちのいずれかを選択する二項対立の関係ではなく、双方を否定し乗り越えた段階にある産業体制を志向することが、『産業体制論』の核心であると言えよう。

おわりに

ここまで、『産業体制論』を主として読み解きながら、サン＝シモンが提唱した「産業体制」に考察を加えてきた。産業体制とは、一言で言えば産業者階級が行政を担う社会体制であるが、実証的学問の体系化と対応する関係にあり、未だ終わらぬ革命を終結させるという意義を委ねられていた。この体制へと移行する最善の手段は、王権が貴族や法律家といった旧体制からの政治的有力者と手を切り、産業者と同盟関係を結ぶことであると述べられている。産業体制下で王権が存在し続ける点については、実利的な側面と理論的な側面からの考察を試みた。実利的な側面としては、王権を否定する危険を避け批判を免れる狙いと、体制を速やかに実現する狙いが読み取れる。理論的な側面では、王権神授説に代表される神学的理論と、形而上学的段階に留まる人民主権の理論の両者を否定するために、産業的な王の立場を求めたと考えられる。一見矛盾とも見受けられる産業体制と王権の並立には、先行する二段階の理論・体制を否定する意図が読み取れることを指摘した。

最後に、今後検討すべき課題点を提示しておきたい。本稿では王権の位置付けについて論じたが、この点には依然として検討の余地が残されている。特に、王の権力の源泉が何に求められているのか、『産業体制論』の検討からは明らかにならなかった。前後する他のテキストを詳細に読み解き、考察する必要があると言える。またコントにも共通して見られる点ではあるが、サン＝シモンの晩年の著作では宗教的紐帯の重要性が強調されるようになっていく。神学、形而上学的理論からの脱却を図った後に、このような思想的展開を迎えることを転換ととらえるか、過去の著作から一貫した連続性を持つものとしてとらえるか、本稿における議論を踏まえた上で、著作全体を俯瞰する分析が求められる。

サン＝シモンが活発に著述を行った 19 世紀初頭は、政治、社会体制が次々に移り変わる転換の時代であった。サン＝シモンの思想を読み解くことは、転換期のただ中において、ありうべき社会がどのように構想されていたかを探る営みである。上記の課題点について考察を深めていくことによって、サン＝シモン自身の着想のみならず、当時の一般的社会概念に接近することが可能となるだろう。

¹ Pierre Musso, *Le vocabulaire de Saint-Simon*, Paris, Ellipses, 2005, p. 41-44.

² サン=シモンの著作については、以下の著作集を参照する。Claude Henri de Saint-Simon, *Œuvres*, 6 vol., Genève, Slatkine Reprints, 1977. なお、この版は 1966 年に Anthropos 社から刊行された著作集のリプリント版である。原著からの引用部分は、森博による邦訳『サン - シモン著作集』(全五巻、恒星社厚生閣、1987-1988 年)を参照しつつ新たに訳出した。なお各註では以下の略号を用い、収録巻数、邦訳の該当箇所を併記する。

Introduction aux travaux scientifiques du XIX^e siècle [1807-1808]: ITS.

Projet d'encyclopédie [1810]: PE.

Mémoire sur la science de l'homme [1813]: MSH.

L'Industrie [1816-1818]: IND.

L'Organisateur [1819-1820]: ORG.

Du système industriel (t. I) [1821]: SI.

Catéchisme des industriels [1823-1824]: CI.

Nouveau Christianisme [1825]: NoC.

³ サン=シモン主義者に関する代表的な文献としては以下のものが挙げられる。鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会 サン=シモンの鉄の夢』河出書房新社、1992 年；鹿島茂『怪帝ナポレオン三世 第二帝政全史』講談社、2004 年；新實五徳『社会表象としての服飾 近代フランスにおける異性装の研究』東進堂、2010 年。

⁴ サン=シモンの思想を取り上げた単著の研究書は、中村秀一の著作(中村秀一『産業と倫理 サン=シモンの社会組織思想』平凡社、1989 年)を最後に 1990 年代以降刊行されていない。論文、記事等については 2000 年代以降、松田昇、中嶋洋平らが数編発表しているものの、海外の研究動向に鑑みると活発とは言いがたい。

⁵ Olivier Pétré-Grenouilleau, *Saint-Simon. L'utopie ou la raison en actes*, Paris, Payot & Rivages, 2001; Philippe Régner (dir.), *Études saint-simoniennes*, Lyon, Presse universitaire de Lyon, 2002; Christophe Prochasson, *Saint-Simon ou l'anti-Marx*, Paris, Perrin, 2005; Pierre Musso, *La religion du monde industriel. Analyse de la pensée de Saint-Simon*, La Tour d'Aigues, L'Aube, 2006; Pierre Musso, *Saint-Simon, l'industrialisme contre l'État*, La Tour d'Aigues, L'Aube, 2010. また、『サン - シモン著作集』の邦訳者である森博の文献目録(『サン - シモン著作集』第一巻に所収)が、2012 年にフランスで刊行された。Hiroshi Mori, *Bibliographie de Claude-Henri de Saint-Simon*, Paris, L'Harmattan, 2012.

⁶ ミュッソはサン=シモンの著作の時期を主たるテーマと照らし合わせ、3 つの区分を設けている。すなわち 1802-1813 年までの哲学的・科学的著作期、1814-1823 年までの政治的著作期、1824-1825 年までの宗教的著作期に分けられる。Musso, *op. cit.*, 2006.

⁷ NoC, III, p. 173. 第五巻、284 ページ。

⁸ 「第二部」、「第三部」となる小冊子その後 1821-1822 年にかけて刊行されている。森博「サン=シモンの生涯と著作(四)」『サン - シモン著作集』第四巻、467-481 ページ。

⁹ Émile Littré, *Dictionnaire de la Langue française*, Paris, Hachette, 1874, s. v. « système ».

¹⁰ コンディヤックの『体系論』からの引用である。Étienne de Condillac, *Traité des systèmes*, dans *Œuvres complètes*, t. II, Genève, Slatkine Reprints, 1970, p. 1.

¹¹ ITS, VI, p. 104. 第一巻、131 ページ。

¹² 『百科全書の計画 第二趣意書』(*Projet d'encyclopédie*, 1810)。

¹³ MSH, V, p. 17. 第二巻、11-12 ページ。

¹⁴ PE, VI, p. 282-283. 第一巻、235-236 ページ。

¹⁵ « système social »の語については、サン=シモンが新たに使いはじめたものではない。ミュッソによると、ルプルチエ・ド・サン=ファルジョ (Lepeletier de Saint-Fargeau, 1760-1793) が 1792 年にすでに用いていた。Musso, *op. cit.*, 2005, p. 71.

¹⁶ 一例を取り上げるならば、『産業者の教理問答』の一節に見て取れる。「[L'espèce humaine] a été destinée à passer du régime gouvernemental ou militaire, au régime administratif ou industriel, [...] Enfin, elle a été soumise [...] à essayer une crise longue et violente lors de son passage du système militaire au système pacifique.», CI, IV, p. 87, nous soulignons. 第五巻、56 ページ。

- ¹⁷ IND, II, p. 23. 第二巻、37 ページ。
- ¹⁸ *Ibid.*, p. 23-24. 第二巻、37-38 ページ。
- ¹⁹ Musso, *op. cit.*, 2010, p. 21-22.
- ²⁰ Karl Marx, *Contribution à la critique de l'économie politique*, traduit par Maurice Husson et Gilbert Badia, Paris, Éditions Sociales, 1972, p. 4 (マルクス『経済学批判』武田隆夫、遠藤湘吉、大内力、加藤俊彦訳、岩波文庫、1956年、13 ページ)。
- ²¹ *Loc. cit.*
- ²² Friedrich Engels, *Socialisme utopique et socialisme scientifique*, traduit par Paul Lafargue, Paris, Éditions Aden, 2005, p. 56 (エンゲルス『空想より科学へ 社会主義の発展』大内兵衛訳、岩波文庫、1966年、42 ページ)。
- ²³ 初期のラムネーは強硬な革命批判を展開しているが、後期には急進的な共和主義者へと転じた。ル・ギョーは下記論文で初期から後期に至るラムネーの思想の一貫性について論じている。Louis Le Guillou, « Lammenais, ses amis et la révolution française », *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, n° 4-5, 1990, p. 715-724.
- ²⁴ 強調原文。Joseph de Maistre, *Considération sur la France*, Nouvelle éd., Lyon-Paris, J. B. Pélagaud, 1866, p. 12.
- ²⁵ SI, III, p. 28. 第四巻、37 ページ。
- ²⁶ IND, I, p. 209. 第二巻、358 ページ。
- ²⁷ SI, III, p. 28. 第四巻、155 ページ。
- ²⁸ Auguste Comte, *Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*, dans *Philosophie des sciences*, éd. Juliette Grange, Paris, Gallimard, 1996, p. 272 ; p. 316-318 (「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」霧生和夫訳『コント・スペンサー』清水幾太郎編、中公バックス 世界の名著 46、中央公論社、1980年、80 ページ ; 115-117 ページ)。コントの三段階の法則については、主著『実証哲学講義』(*Cours de Philosophie positive*, 1830-1842)、『実証精神論』(*Discours sur l'esprit positif*, 1844)でも言及が見られるが、サン=シモンの『産業体制論』との関連を検討する上では、1822年に執筆された「科学的作業のプラン」をより重視すべきであろう。
- ²⁹ 「彼らの著作の最終原稿にそれぞれが寄与した正確な度合をめぐって、一世紀以上にわたり激しい論争が、特にオーギュスト・コントとサン=シモンの熱心な支持者たちの間で行われてきたが、何の解決を見ることもなかった」。Frank E. Manuel, *The New World of Henri Saint-Simon*, Cambridge, Harvard University Press, 1956, p. 195 (『サン・シモンの新世界』(下)、森博訳、恒星社厚生閣、1975年、383 ページ)。
- ³⁰ SI, III, p. 12. 第四巻、28 ページ。
- ³¹ *Ibid.*, p. 6-12. 同上、24-28 ページ。
- ³² *Ibid.*, p. 48. 同上、50 ページ。
- ³³ サン=シモンはフランスの生産者、産業者の人口についてしばしば言及しているが、当時の社会状況に鑑みてどの程度妥当なものであるかは、今後検討すべき課題のひとつである。
- ³⁴ SI, III, p. 43-44. 第四巻、47 ページ。
- ³⁵ サン=シモンの「産業者」の定義は著作の時期によって若干の異同を含むものの、「あらゆる種類の産業活動に従事する者」を指し示す点で一貫している。この特徴がもっともよく表れているのは、「サン=シモンの寓話 (*La Parabole*)」とも呼ばれる『組織者』の「第一抜粋」であり、「もっとも本質的に生産的なフランス人」として、46 の職業名が列挙されている。これらの職業には学者、芸術家、銀行家、職人、農耕者などが含まれ、非常に多岐に亘っている。ORG, II, p. 17-19. 第三巻、263-264 ページ。
- ³⁶ SI, III, p. 110-111. 第四巻、89-90 ページ。
- ³⁷ *Ibid.*, p. 112. 同上、90 ページ。
- ³⁸ *Loc. cit.*
- ³⁹ ORG, II, p. 17-21. 第三巻、265-266 ページ。これがいわゆる「サン=シモンの寓話」である。王家、貴族、聖職者、大ブルジョワの喪失と、生産的なフランス人の大多数を失った場合とが対比されてい

る。前者が国にほとんど支障をもたらさないのに対し、後者は「フランス国民を魂のない肉体」と化し、他国民に比べ劣悪な状態にさせると想定されている。「寓話」を発表した翌年（1820年）1月に逮捕された後、2月13日にベリー公の暗殺事件が生じ『組織者』はいっそう物議を醸したが、結局サン＝シモン自身は不起訴となった。Pétré-Grenouilleau, *op. cit.*, p. 305-312.

⁴⁰ Comte, *op. cit.*, p. 274. 邦訳、82ページ。

⁴¹ SI, III, p. 205. 第四巻、149ページ。

⁴² *Ibid.*, p. 206-207. 同上、150ページ。

⁴³ 強調原文。 *Ibid.*, p. 208. 同上、150-151ページ。

⁴⁴ *Ibid.*, p. 205-206. 同上、149ページ。

⁴⁵ こうした議論は例えばラムネーの『宗教に関する無関心論』などに見られる。Félicité de Lamennais, *Essai sur l'indifférence en matière de religion*, t. I, Paris, Toumarchon-Molin et H. Seguin, 1817.

⁴⁶ SI, III, p. 209-210. 第四巻、152ページ。

⁴⁷ *Ibid.*, p. 211. 同上、153ページ。

⁴⁸ 註28参照。

⁴⁹ Comte, *op. cit.*, p. 274. 邦訳、82ページ。

⁵⁰ *Ibid.*, p. 281. 同上、88ページ。

⁵¹ *Ibid.*, p. 278. 同上、85ページ。

⁵² 「文明の前進に向けて法律家と形而上学者の演じた特殊な役割が有益であったことを否定するのは馬鹿げているとしても、この有益性を過大評価すること[……]は大変危険である」。SI, III, p. 9. 第四巻、26ページ。

Du système féodal au système industriel — La pensée sociale de Saint-Simon —

Sayuri Shirase

Claude Henri de Saint-Simon (1760-1825) est connu comme penseur et théoricien de « l'industrie » au XIX^e siècle. Cependant, ce cliché ne rend pas compte du noyau de sa philosophie. Il n'est pas pertinent de concevoir la « société industrielle » ou le « système industriel » dont il parle à partir de l'acceptation courante qu'ont ces expressions de nos jours. Qu'est-ce qu'une société qui dispose d'un « système industriel » chez Saint-Simon ? Son ouvrage intitulé *Du système industriel* (1821-1822), sur lequel nous nous appuyons ici, permet d'apporter quelques réponses à cette question.

D'abord, nous nous penchons sur la définition du mot « système ». A partir d'une comparaison entre *Du système industriel* et *Introduction aux travaux scientifiques du XIX^e siècle* (1807-1808), nous établissons la connotation de ce terme. Dans ses premières œuvres, l'auteur utilise ce mot au sens de « doctrine » ou de structure constituant un ensemble organique sur l'art et la science. Puis il lui donne le sens de « constitution » politique et sociale. Il considère qu'« un régime social est une application d'un système philosophique » (*Industrie*, 1816-1818), liant ainsi deux sens différents du terme.

En second lieu, nous proposons une analyse de l'ouvrage, autour de son sujet principal, la transition d'un système à un autre. Saint-Simon considère la Révolution comme « inachevée ». Il a donc besoin de constituer un système industriel qui remplace un système féodal, afin de la terminer. Le système industriel se compose d'une organisation du corps administratif dont les industriels sont chargés. Avec ce système, notre auteur suppose qu'on peut favoriser le plus grand nombre, qui s'occupe des activités industrielles ou productives.

Enfin, nous examinons les moyens par lesquels est mise en œuvre cette transition des systèmes. Saint-Simon déclare qu'une ordonnance du Roi suffit à

réaliser ce projet. C'est là même le seul moyen envisageable car le gouvernement est formé d'hommes qui ne sont pas des industriels et qui ne comprennent pas cette idée. La classe industrielle profite de la royauté, et réciproquement. Cette voie de transition permet idéalement de clore immédiatement la Révolution inachevée. En tenant compte de la « loi des trois états » formulée par Auguste Comte, secrétaire de Saint-Simon de 1817 à 1824, nous abordons l'analyse sur le système industriel par rapport à la théorie de la « souveraineté par la grâce de Dieu » et de la « souveraineté du peuple ».